

## ならやま里山林の来しかた、行く末

一緒に里山ボランティアしませんか！！

杉山 耕二

私は若い頃から、柳生までのウォーキングの都度、ならやまベースキャンプ(BC)を通っていた。滝坂の道から円成寺に抜ける細道は、鬱蒼とした放置人工林に両側から挟まれていた。ところが峠の茶屋を越えたあたりに見事に整備された森林があり、表示板を見ると針広混交林の実験施業地であるとの由。手を入れればこんなに素晴らしい森林になるのだなと実感した。

そんなことから、第2の人生は放置された森林の整備にボランティアとして、細やかながらも貢献したいという思いで、大阪のNPOが主催する森林ボランティア養成講座(森林大学)を受講して、以来森林整備活動に取り組んできた。ところがその団体は、地元奈良には活動地が無かったので、適当なところはないかと探していた頃、たまたま「ならやま」を通りかかると、丁度今のBCの整備初期の段階で、会員募集の看板を見て即入会し、昨年末で満11年を超えた。

その間、ならやま里山林の整備活動で取り組んできたことを、大まかにご紹介する。

### <まずその大前提として>

ならやま活動地一帯は、昔は赤松を中心とした林分であったが戦後の燃料革命やマツ枯れ被害などの影響で赤松は殆ど枯死し、現在のコナラ、ソヨゴ、カシなどの雑木林に自然に遷移した。この現実を、まず我々が受け入れたうえで、かつ古都法に基づく維持・管理をしていく必要がある。(要は、派手な花木や果樹を植えてパッチワークのような里山にしてはいけない)

### <第1期:基礎整備段階 2008年~2013年>

奈良県から受託したならやまの里山について、まず実態調査を行って整備方針を策定した。それに基づき活動を開始した時期である。調査の結果、管理受託したうち、ならやま里山林(里山林)は具体的に整備を実施することとし、残る

ならやま自然の森(自然の森)は、凍結的保存(要するに手を付けないこと)とした。

また、里山林(約5㍍)の整備に関する基本方針を以下のとおり策定した。

#### ① 古都奈良の歴史的風土にふさわしい景観

形成活動を基本コンセプトとする。

#### ② 豊かな自然の形成:具体的には里山生態系の保存と世代更新の確保を活動目標にする。

この方針に基づき、里山林を30区画(40m四方/0.16㍍×30区画=約5㍍)に区分して、枯損木・支障木・常緑樹・低層木の除伐、間伐等の整備活動を行った。

里山林整備というのは、人手を掛けて樹を伐るなど山に人為的攪乱を起こし、日陰に潜んでいた稚樹の生育促進や萌芽による自然再生、或いは植樹した樹を育成するということである。しかもそれを継続し続けることである。

当期では、全30区画の間伐整備とその中で3か所の部分皆伐も行い、萌芽試験を実施した。この結果、凍結的保存とした「自然の森」と比較すると、「里山林」は格段に明るく、きれいな里山に整備された。この時期の作業は手鋸や枝切り鋏での手作業が中心であった。そのため里山グループだけでなく全員で協働作業していた。しかし、大径木を伐採する世代更新は、未だ手付かずの状態課題として残った。これが後のカシナガ被害の助長にも繋がることとなった。

### <第2期:植生の再生・更新とカシナガ被害対策 2014年~2018年>

前期で間伐と試験皆伐の両方を実施したが、間伐では萌芽や植樹木の育成に満足な結果を得られなかった。そのため2014年秋に経団連の補助を得て、皆伐エリアを実験区の5倍にした拡大皆伐(0.2㍍)に取り組んだ。この作業は危険を伴うこともあり、大阪のNPOボランティアの協力を得て実施した。この跡地を整理・地拵えして、DNAを守る観点から、ならやま採取したドングリから育てたクヌギ・コナラの苗木を約200本植樹し、約6年を経た現在、

若木として順調な生育を見ている。

一方この時期は、カシナガ被害とその対応に追われた時期でもあった。当初は種々の防御対策を実施したが自然の摂理には逆らえず、数年にわたり被害木の伐採、整理作業に翻弄された。

カシナガ発生初期段階で被害確認のため最初のコナラ毎木調査を実施し、約2,000本を確認したが、2018年集計では約1,000本と半減した。この内訳はカシナガ被害以外の椎茸楯木用や経団連皆伐、自然災害での風倒木伐採などが合わせて約300本あるので、これを除いた約700本がカシナガ被害木であったと推測される。

また、林野庁の森林・山村多面的機能発揮対策事業に参加するのを契機に、全30区画についてカシナガ被害木の伐採作業と、見た目きれいな森林整備(いわゆる手鋸作業)を並行して実施したことで、里山林全体30区画を第1期・2期と合わせて2回転整備したこととなった。なおカシナガ被害は、2017年の爆発的発生を最後に、その後はほぼ終息に向かった。

更にこれらカシナガ被害木の幹部分をエンジン付き薪割り機で加工し、ストーブ用薪として外部に販売するなど資源活用を図ってきた。

### <第3期：現状 2019年以降>

里山林はコナラ枯死木の処理を終え、現状は植生の更新と再生に軸足を置きつつある。

その方法論として、前述のとおり部分皆伐して萌芽・植樹で更新していく方法を主体に、かつ手鋸、鋏の手作業による見た目きれいな里山整備をも並行して推進することを計画している。

部分皆伐の地区については、当面経団連皆伐地の東側を鳥観の丘に向かって作業を進めている。ただ現状における問題として、メンバーの高齢化と新規加入者が少なく、後継者の育成が進んでいないという大きな課題が残っている。

以上、これまでの経過と現状・課題を述べた。

### <ところで>

最近、会員から里山グループには近寄りがた

い、という意見を聞く。これは前述のとおりここ数年にわたりカシナガ被害の大径木の伐採に携わってきた関係で、あたかも拙人のように映ったことは否めない。プロでも大径木の広葉樹伐採は危険な作業といわれており、そういう緊張感などが風体から発散していたと思われる。また、全ての会員は、何時でも、誰でも、何処へでも活動に参加できる権利があり、各グループはそれを受け入れるべき、という意見もある。本会の趣旨からするとそのとおりであろう。

### <里山整備作業の特殊性>

ただそこには一定の条件が必要なこともある。特に、里山グループの作業(基本は樹を伐る)は危険を伴うものなので、そういうことを承知で、「顎・足・怪我は自前持ち」のボランティアとして参加し、里山を綺麗にしようという「志し」を持っていることが必要である。更に基礎的知識(会に小冊子あり)を一通り理解しておいてもらうことも必要である。里山ボランティアではよく「KY」能力を身に着ける必要性を説く。世間で言われている意味での「KY」と違って、危険予知能力のことで、これは自身の安全と協働作業、および傍観者(実はこれが一番問題)の安全を確保する重要な能力である。こう書いてくると、里山グループへの参加を拒んでいるように見えるが、決してそうではなく、まあ安全確保の転ばぬ先の杖と思って頂きたい。

里山整備には、樹を伐る作業に関連した軽微な作業は沢山あります。例えば、①伐倒した枝条の整理、整頓 ②チップ処理 ③苗の育成 ④植樹関連 ⑤薪割り ⑥椎茸関連 ⑦林縁部へのコバノミツバツツジ移植・育成 ⑧ロープワーク ⑨道具類、動力機器の操作・保守管理・・・など例を挙げるだけでも沢山の作業があるので、自分の好み、能力、体力に応じた作業を選んで参加してください。初めての方もマンツーマンで懇切丁寧に指導させていただきます。

里山ボランティアを共に楽しみましょう!

明るく、楽しく、無理をせず・・・